

第61回仏教保育大学講座 開催報告

保育連盟研修委員会（仏教保育大学講座指導員）

本年も猛暑の中、3泊4日で行う第61回仏教保育大学講座が真宗大谷派の担当で開催されました。

当講座は、真宗佛光寺派・真宗興正派・真宗高田派・真宗出雲路派・真宗大谷派・浄土真宗本願寺派の真宗6派に所属する保育園・幼稚園・認定こども園の保育経験年数1年以上の保育者が対象の講座で、今回は112名の参加をいただきました。

日々の保育に追われる中で忘れている、保育するということの本当の意味を真摯に振り返り、保育するすがたを親鸞聖人の生き方に学ぶ中で、参加者同士が語り合い、仏教保育の学びを深めていくことを目的として毎年開催されます。

本年は、当講座の直前に第31回全国保育大会が開催されたため、例年に比べると参加者スタッフともにたいへん忙しい中での開催となりましたが、参加者の熱意に助けられ、充実した内容で終わることができました。



開講式（東本願寺御影堂）

1 日目

開会式は東本願寺の御影堂で行われました。その後会場をホテル洛兆に移しました。この日は、まず真宗大谷派の指導員脇淵徹映先生による基調講演から始まりました。この講演で脇淵先生は、当講座の指導員を務められていた先輩である井伊各量先生のエピソードを話されました。

「私は井伊各量先生から多くのことを学びました。井伊先生は、『私は生まれてすぐ海辺で拾われて寺で育てられた。にんじん、大根、ごぼうばかり食べていたので、ごぼう臭い』。ごぼう坊主、などと言われた。けれども、育ての母は、お坊さんは、まごころを食べるんです。まごころは目に見えにくいを感じるものです」と話してくれた。そこから、本当に大切なことは、目で確認できたり頭で理解できることに限るものではなく、肌や身体全体で感じるものである、ということとを井伊先生が教えてくださいました」と語られました。

また脇淵先生は、「IQなどで測れる能力『認知能力』に対し、今は、IQで測ることができない『非認知能力』が注目されています。これは、『最後までやり遂げる力』『我慢

強いこと』『首尾一貫性』『他人とうまくかわる力』『誠意』『知識の質』などをいい、『EQ』『コンピテンシー』などと類似するものと解され、『1+1=2』等の知識・認知能力・IQ・コンテンツ・知識の量などと対比するものと解されています。この問題を保育の上でも考えてみましょう」と問題を投げかけられました。

2 日目

2 日目は、興正寺の晨朝参拝に始まり、大谷大学にバスで移動して、午前9時より講義①が始まりました。今年のご講師は、真宗大谷学園専務理事の真城義磨先生で、「認めて伸ばそう」と題して講義が行われました。講義の中で真城先生は、「仏教の出発点は『天上天下唯我独尊』（私たちは、いかなる境遇にあってもかけがえのない存在であって無条件で尊者として生まれてきた）である。こ



講義 真城義磨先生

の私は、いかなる状況にあってもかけがえのない存在であり無条件に尊いと、仏様から認められている。そしてそのことは隣の人も同様であるという感覚、認識が、私たちが思い通りにならない現実を生きていくのを支えてくれる。その支えの大地であり暖かく照らす慈光が宗教である」という話をされ、その後班別討議①②に入りました。

班別討議では、講義の内容と自分の課題を照らし合わせ、自らの保育する姿を深く振り返り、日常の中では気づかなかったことに気づき、保育するという本当の意味に真摯に向き合う時間となりました。また、班別討議①と②の間に野村佳代先生の讃歌指導があり、心和时间となりました。夕方にバスで洛兆に移動し、夕食ののち「夜のつどい」が始まりました。夕方に示された「お題」を班ごとにスタンツで表現し、その内容を当て合うゲームが行われ、また、班ごとに手遊びやご当



讃歌指導 野村佳代先生

地紹介の歌なども披露され、大いに盛り上がり、各班とも参加者同士の絆が深まった2日目でした。

3日目

3日目は東本願寺の晨朝参拝から始まりました。参拝の後、バスで大谷大学に移動し、朝食をいただいた後、2日目に引き続き、真



班別討議の様子

城義磨先生に講義をいただきました。

その後、講義2回、班別討議3回を終えた時点での中間報告として全体会を行いました。全体会では真城先生にも参加していただき、各班からの課題について話し合いをし、他の班の発表に対する質問や意見が取り交わされました。

続いて、全体会で話し合われた参加者よりの疑問や意見を受けて、真城先生よりまとめの講義が行われ、いよいよ最終日に向けて、参加者の学びも深まってきました。

大谷大学での研修が終わると、洛兆に戻り、夕食は恒例のすき焼きを班ごとにいただきました。夕食後は班別討議をし、これまでの自分自身の学びをレポートとしてまとめました。

4日目

最終日は、早朝から西本願寺での晨朝参拝から始まりました。4日間の朝のお勤めも最後までしっかりと行うことができ、朝食の後には荷物の整理をし、全体討議に移りました。

今回の全体討議は今まで共に学び、班別討議を繰り返し行い、身も心も通じ合ってきた参加者の最終の振り返りと発表の場となり、

また指導者側もこの講座で学んだことを噛みしめ、学びある時間でもありました。

最終の全体討議はシンポジウムの形式をとって行われました。

全体的な課題となった「子どもをありのままに認める」とはどういうことなのかを発表しあっていく中、各班ごとにそれぞれの「答え」が飛び交いました。答えを出そうとすればするほど、なかなか答えが出ない状況が長く続きます。

真城先生の講義の中で「私たち人間は出会ったモノを、自分の知っている枠の中だけで見ようとすると、自分のものさしで見ようとする」と言う言葉が当てはまった気がしました。「ありのままを認める」と言うことを深く掘り下げればするほど、そこにははっきりとした答えが出てきません。

自分ではわかったような気であることに、実はもっといろいろな気づきや隠れているということ、認めることの難しさ、そして、職場の人間関係や子どもたちをどう認めていくのかなど、いろいろな意見が飛び交う中、班別討議に移っていきました。

班別討議では「答えを出す難しさ」「出した答えは必ずしも真実ではないこと」「結論

を出さないことも一つの方法」「はっきりと答えが出ない中、モヤモヤした気持ちを職場に持ち帰り職場の考えを聞きたい」などさまざまな意見や、今後の目標を見つけ出していました。

閉会式の謝辞はとても印象的で、初めて会う、生まれも育ちも経験も、まったく違う参加者が、たくさんのご縁をいただき寝食を共にし、学び語り合った仲間への感謝の言葉と、仏教保育大学講座の学びの深さをあらためて感じさせてくれるものでした。

△受講生代表の謝辞▽

私は、今年度初めから、自園で仕事上の失敗をいくつも繰り返し、同僚に迷惑をかけて、その都度助けてもらい、さらには、この講座に来る直前に大事なパソコンデータを消してしまい、それを先輩に直接伝えられないまま京都へ向かうこととなり、たいへん落ち込んでいました。

そして、この仏教保育大学講座に参加し、初日の自己紹介と感謝でそのことを思い切って皆に話すと、皆さんは心配したりやさしく受け止めてくださいました。

その後、自園での失敗の報告に対する先輩



全体討議の様子

からの返事も、「失敗を補うことは、お互いさまだよ。暑い京都での研修もがんばってね」といういたわりのことばをいただき、また救われました。私は、人を思いやり、信じ、許すことばは、落ち込んだ人の心を救うものだということを学びました。

その後、失われたと思っていたパソコンデータは、先輩が別で保管していたということを知り、なにか今後さらに希望を持って進ん



閉講式 修了証の授与

でいくことができそうな気持ちを持って、地元や自園に帰るのが楽しみになりました。

ありのままの自分や子どもたちを受け止めることは、決して行為のあれこれを評価することなどではなく、存在そのものを受け止める謙虚に向き合っていくことだ、と教えてくださった真城先生や指導員の皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。